

研究論文

教学への沈潜は教化へ向かいうるか

— 教学と教化学の一体化を目指して —

山内寛久

はじめに

天台大師は『法華玄義』巻十上において、妙法蓮華經の「教相」を解釈するにあたり「若し余經を弘むるに教相を明かさずば義に於て傷ぶること無し、若し法華を弘むるに教を明かさずば文義に闕くること有り」と開口一番述べられている。即ち、法華經以外の諸經を弘める場合、各經典の教義内容の違いを明らかにしなくても教の意義を損う事は無いが、いざ法華經を弘めるにあたっては、他教との教義内容の違いを明らかにしなければ、法華經の本意を失う事がある、と言われるのである。日蓮聖人は『諸宗問答鈔』に上記の『法華玄義』の文を引用した上で「若し教相に闕くして法華の法門をいへば法華經を讀むといえども還つて法華の心を死す」と示し、他經と法華經の教義の違いについて精通しないで法華經の教えを表現してしまうと、法華經を讚嘆しているようでも、かえって法華經の本意に背いてしまい法華經のいわんとする本当の心を殺してしまう、と仰せられている。引用した『諸宗問答鈔』後半の文は、法華經が他經他宗より勝れた点を十の項目を立てて述べられた伝教大師最後の著作『法華秀句』の文である。よって天台・伝教両大師と日蓮聖人に共通する一切經の教相判釈を一言でいえば「法華經と他の諸經の違いを明確にせ

よ」という事になる。このような教説を受けると我々日蓮宗教徒は例えば『開目抄』の「此に予愚見をもて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに其相違多しといえども先ず世間の学者もゆるし我が身にもさもやとちをぼうる事は二乗作仏・久遠実成なるべし」などの文から「法華経は他教に無い二乗作仏があるから尊い、久遠実成が明かされるから救われるありがたい経典だ」と主張したりするわけである。しかし問題は、なぜ二乗作仏が尊いのか、なぜ久遠実成が有り難いのかという事である。

二乗作仏・久遠実成に限らず、十界互具、一念三千、三諦円融、三身即一の仏身義、女人成仏、煩惱即菩提など法華円教独自の真理観を表す用語は多々あるが、大事なものは、その用語の示す意味の内容である。久遠実成だから釈尊は永遠である、というだけでは甚だ抽象的で説得力が無いどころかそもそも説明になっておらず誤解をも生じかねない。煩惱即菩提だからとて煩惱を無条件にそのまま菩提（悟り・救い）であるとは天台大師も日蓮聖人も決して言っていない。字面のまま受け止めてしまうと、法華経の真意を誤解しかねないのである。法華円教の教説（教相）を文章通り先ず知り、その文章、言葉の意味する内的構造（教理内容）を把握（観心）し得た時、理智的に普遍性をもって一般にも納得できる教学が確立し、教学と教化学の一体化の地平が開かれるのではないかと考えるのである。以下、教学と教化学の一体化を図る上での前提となる条件を思案として述べてみたい。

法華経と法華経的なもの

日常の様々な現場で「これは法華経的だな」と思う瞬間に出くわす事がある。そんな時いつも葛藤が生じる。即ち、その法華経的なものに法華経の信仰や認識、言葉が無くてもこれを法華経として認めて良いか否か。反対に法華経を信奉していると称していても、その内容が例えば浄土教的であったり、キリスト教的であった場合、果してこれを法華経信仰と認めて良いのかという問題である。個人的主観から「法華経的である」と勝手に認定してしまうという危

うさがある事は当然想定しなければならない。しかし所属する組織やイデオロギーを排除し、天台大師や日蓮聖人が顕彰、教示された法華経教理を学ぶ者同志であれば、部分的であったとしても共通して共感できる内容は各場面で行々にしてあると思うのである。そこで、法華経と法華経的なものに視点を置き、近世から近代に至る受不施日蓮宗一致派（以下日蓮宗一致派と略称）の教学に則り開会に視点を置き思考する所を述べてみたい。

優陀那日輝批判

近世江戸時代前期、一如日重、寂照日乾、心性日遠らによつて日蓮教団の刷新が図られ、時代に即応する日蓮教団教学の基礎が築かれた。その後、観如日透、一妙日導を経て幕末優陀那日輝、新居日薩によつて一往の教学の大成を果した日蓮宗一致派（開権顕実の絶対開会の立場から広学を推奨し、内に厳しく外に寛容な態度を取る、受派、内省派、倫理実践派と称される現在単称日蓮宗につながる一派）と、相對差別判の廢權立実の立場から折伏法体主義的傾向の強い富士大石寺派、勝劣派、不受不施派（現在においては、日蓮正宗・顕正会・勝劣派法華宗・不受不施派・国柱会・日本山妙法寺など）との教義及び教義の相違について、近年日蓮宗内においては、望月歆厚・執行海秀・茂田井教亨・浅井円道・渡辺宝陽・北川前肇・小野文琬の各先生を中心に詳細且つ情熱的に論じられてきている。上記の先生方の学恩を蒙り、あえて繁雜な教学論や用語に捕らわれず、日蓮宗一致派と先に挙げた日蓮系各派教団の教義の違いを単的に言えば、結局、法華経的なものを法華経として認めることができる（日蓮宗一致派）か否（日蓮系各派教団）かという色分けができるように思われる。日蓮系各派教団の教義信条を体した人師及び信徒が社会に進出し交わる中で活躍した史実が見つかからない理由は、日蓮系各派教団の教義に社会と積極的に交わり、関わる中で、計らずも、おのずからひとりで（自然に）教化に繋がるような教化の理論（教化学）を有していない所に起因する（單純に社会に交わる事だけが良いとは言えないが）、即ち、日蓮系各派教団の信仰、信条をもたない個人、団体、社会、

国家に対しては謗法として折伏するか、「親近せざる」かのどちらかにしか選択の余地がないのである。では、日蓮宗一致派はどうであろうか。

日蓮主義研究者でもある西山茂博士は「田中智学と日蓮主義を再考する」と題する論稿を季刊誌『福神』第一号に寄せているが、その中で田中智学による優陀那日輝批判について、

智学によれば、本化仏教（日蓮主義）は、あくまで、世俗社会に干渉し、それに「侵略的に」対応するものである。つまり、本化仏教は、「寺院や仏壇のなかに閉じ込めておくことのできない」宗教なのである。ところが、智学が若くして学んだ優陀那日輝流の摂受主義宗学は、他宗教をはじめ国家社会にも不干渉の、甚だ観念的なものであった。

と、紹介している。優陀那日輝の学風の批判は、優陀那日輝生前から今日に到るまでたびたびなされている事であり、日蓮宗一致派内からも異端派の謗りを受け批判があったのも事実である。だが果して優陀那教学（日蓮宗一致派教学）は「寺院や仏壇のなかに閉じ込めておく」だけの教学に過ぎないものなのか、優陀那教学（日蓮宗一致派教学）が「観念的」なものだけに終始し、社会と関わりをもつ教学理論は本当に存在しないのか、実際に優陀那教学の教理を体して社会に進出し、活躍する人物はいなかったであろうか、等々、素朴な疑問が起ころのである。

正法の新見解

東北大学教授佐藤弘夫博士は著書『日蓮』また、福神叢書『日蓮的あまりに日蓮的な』所収の「立正安国論をめぐって」において、「立正」の意味するもの、という項目を設け、『立正安国論』における正法について、

これまでいわれていたように法華経一經に限定することは適切ではない。むしろ、より広く法華経を中心とする一切の大乗諸経であり、それらの諸経典に依拠する旧仏教諸宗と考えるべきである。

と説き、正法を規定している。即ち、三十九歳『立正安国論』執筆時の日蓮聖人における念仏批判は、浄土三部経・念仏以外の諸経・諸行を「捨閉闍拋」として全否定する法然念仏の独善的排他性を指弾するもので、大乘仏教の一法門である既存の念仏についての批判ではないと指摘するのである。

上記の念仏批判のあり方は、佐後においては変わってくるのではないか、との指摘もあるかもしれない。しかし、真筆遺文、及び真筆遺文に準ずる遺文に依って佐後の教説を見ても、日蓮聖人の諸宗批判、諸人師の批判の原則は、法華経を蔑ろにする、下位に置く、義を盗む、法華経信仰者の法華経信仰に対する臆病、に対しての批判であり、像法時とはいえ、天台大師に念仏信仰、禅の実践、戒律の遵守等があり、伝教大師は、これにさらに密教の実修が加わるにも関わらず、日蓮聖人が天台・伝教の両大師を外相承の師として崇め奉る理由は、両大師とも法華経を頂点とする姿勢に変わりがないからである事を思うとき、先の『立正安国論』の正法観は、日蓮聖人の生涯（佐前・佐後）を貫くものであったとみる事ができるのではないか。言うまでもなく、日蓮聖人は終生『立正安国論』を講述されている。

日蓮宗一致派教学の真理観

上述の見解が許されるならば、日蓮聖人の生涯を通しての言動から抽出できる思想の展開の可能性として、正法とは法華経の教えの内容である円教が説く所の妙法であり、正法を立てる（立正）とは、法華経という固有名詞や、法華経の経文上の文章が無くても、諸法世間の中に法華経的なものを見つけた場合、これを法華経の理に適う妙法として積極的に認め、引き出し、逆に妙法に背き、違^{たが}う内容であれば、一旦否定的に指摘した上で、これも妙法実現、確認の存在意義として肯定的に認め導き妙法化する。また、法華経的なものが無い場合、法華経的なもの（妙法）を創造していく、という見方ができてくる。即ち、正法の内容である妙法とは、ある固定的に決定された言葉、行動のみ

を言うのではなく、法華経の中に、いろいろな仏、菩薩が説いている法華経があるように、釈迦牟尼仏に限定されない、広く多宝如来に総括象徴される過去仏や、十方分身の諸仏、諸菩薩が悟った真理（仏意、仏慧、慈悲）として、時代状況や、衆生が織りなす様々な現場（俗間教書治世語言資生業等・一切世間の治生産業）で『法華経』の教相上の文章のみに制限されない多様な言葉、行動、姿によって現し出す、法華経受持信行者の主体性（観心）をもって実現すべき真理であると考えられる事ができる。

教学と教化学の一体化を考えるにあたって上記の論理を念頭に置き、唐突であるが『観心本尊抄』の本法三段をみてみたい。

日蓮聖人が『観心本尊抄』において、五重三段（四種三段）を明かし、本法三段、正宗分に及んで、一切の経々を「寿量の序文」と判定しているが、寿量品と示さず、寿量と表現された所に文上（教相上）の寿量品との竹膜を隔てた（相即しながらも）相違がある。この寿量の序文とは『観心本尊抄』の本法三段の説明によれば、大通智勝仏の法華経より、釈尊在世の五時八教（一切経）の教え、十方三世諸仏の説いたありとあらゆる経々を言うが、現在の地点から言い加えれば、論語でも聖書でも、コーランでも、古今東西の哲学でも、一切が寿量品文底観心によって意義が位置付けられる（開顕会通）される、という広大無辺なスケールをもった法門であると言える。日蓮聖人が釈尊滅後、正法時、像法時を過ぎた末法の始め、法華経が存続するか、消滅するか危機的時代の、「末法の始め」と限定される五百年の間に、本化の上首として出現し、邪智謗法の衆生が充滿する娑婆日本国に、本門に立脚する法華経を下種結縁（謗法呵責による受難の色説を實現）した事が、歴史性を有し、現証を最重要視する法華経の真実の証明となつて本法三段の法門が立てられる。そして、この本法三段による寿量品文底観心の樹立は、日蓮聖人以後、即ち、末法時に突入し『法華経』を強いて折伏下種しなければならぬ始めの五百年が終つた暁に、本化の教徒が、法華経の一文一句や、折伏的教条に執われず、主体性をもって自由に世間において法華経的なもの（法華の教えに基づく所の妙

法)を承認、蘇生、発掘、創造し、熟益、脱益の撰受折伏妙用を展開する印(印可、許可)となっているものと考え。故に、日蓮聖人の末法の始めの法華経色説による下種結縁の功績は筆舌に尽し難く、絶妙にして、以後の本化教徒及び一切衆生をあらゆる束縛から開放した大恩人と言える。

優陀那日輝は『撰折進退論』に、

宗祖弘経ノ当時、後五百歳ノ時ハ折伏ニ宣シキトキナリ。後五百歳ハ末法ノ初五百年ナリ。天文二十年ニテ五百年尽ス。天文法乱ハ折伏ノ衰フル相ナリ。堺妙国寺日珖台家ノ学ヲ開ク、撰受ニ赴クベキノ時ヲ知ルガ故ナリ。とて、日蓮聖人の法華経を弘通する当時は、釈尊入滅後二千年から二千五百年中の折伏が正しく適する末法の始めの五百年の時代である。しかるに、この末法の始めの五百年は、年号では天文二十年(西暦一五五一年)で終わるのである。天文法乱のような事は、折伏の行為が時代に違ひ、功を為さない事を見せられたものである。したがって堺妙国寺、仏心院日珖の前半生は折伏正意であったが、比叡山の僧兵の襲撃により、京都日蓮教団の全寺院が壊滅した天文法難や天正七年(一五七九年)、安土宗論において、如何ともしがたい国家権力の横暴と理不尽にして不条理な仕打ちを体験した後、天台三大部をはじめ、広学多聞の宗義研鑽の学風を開き撰受の弘教に向かわしめた事は、弘教方規の時を弁えた達見である、と述べられている。

優陀那日輝は『一念三千論』で、さらに次のように述べる。

當家事観の意は久成本有の圓佛体、散じて一切衆生の色心と為り、法界全く本佛の全身なり、一佛心上の三千なる耳、故に法身の体徧じて一切衆生の身体と成り、報身の性徧じて一切衆生の受想行識となり、応身の相徧じて一切衆生の眼・耳・鼻・舌種々の形相と為る(中略)。性相色心佛境界に非ざることなし。故に凡心即佛心なり(中略)行者の自体全く是れ佛果受用之自受用報身、不如三界見於三界之妙身也。

私訳を試みる。

そもそも日蓮聖人及び日蓮宗一致派の法華経寿量品文底、事の一念三千の観心とは、久遠実成の積尊が、本来有している法身・報身・応身の円満相即する法華円教の仏心体が分かちはなたれて、生きとし生きる一切衆生の身心と体化する事で法界全体が本仏積尊の全身となる。即ち大慈悲心を本性とする久成本師積尊の尊い三千大千世界である。したがって、一切衆生の身体が久成本師積尊の真理身として現れ（法身）、一切衆生の精神作用（心法）と行動は久成本師積尊の智慧を獲得する行として現れ（報身）、一切衆生の物質的感覚器官（色法）は衆生教化救済のため応現する久成本師積尊の応身の形相（応身）となって現われるのである。一切の心の働き、存在は久成本師積尊の境遇環境でないものは無い。こういうわけで妙法を受持（事の一念三千を観心）する凡夫心は即仏心なのである。妙法を受け持ち行ずる（寿量品文底事の一念三千を観心する）者自身が全体、久成本師積尊の妙法の悟りを受け持ち用いる本因本果具足の仏心にして、迷いに満ちた三界の衆生が迷いの目で三界を見るようには見えない三身具足の妙身体なのである。

即ち、優陀那日輝は、久遠劫来、九界の経験を踏襲して人間積尊が、久遠実成の佛と成られた。その久遠実成積迦牟尼の本法を明かした法華経の真実〓妙法を日蓮聖人が末法の始め五百年中、身命を賭して実践、具現、証明せられた事実を絶対条件として、仏滅後二千五百年以降、我々本化の教徒は自ら、この法華経の妙法を信じ、行じ、体験、認識する事で、自己に内在する、積尊、日蓮聖人が体験し妙法化（當知身土一念三千故成道時稱此本理一身一念遍於法界）した三千世界（一切の存在の本来の有り方、意義）を顕現する、と言うもので、人間を主体とした、人間本仏論を究極とする論理である。くり返しになるが、この人間本仏論は人間積尊が、修因感果の事実を踏襲して本門の本尊釈迦牟尼仏に成られたと言う、法華仏教の積尊本仏論から導き出された究竟の結論であり、中古天台本覚思想のあるがままの凡夫本仏論とは意味が全く異なる事を注意、強調しておきたい。因みに執行海秀先生は、この優陀那日輝の『一念三千論』の事観論について、

この文は一見、絶対精神とも云ふべき本佛の『自己実現の様を説明したもののやうにも解される。然し日輝教学の真意は人間自身の自己実現の中に本仏の実現を見るのであって、どこまでも能動的主体を自己に置くのである。この点、一致派教学の特色を發揮したものと云える。ただ従来の教学（一妙日導の五大観などに象徴される一致派教学※筆者注）がややもすれば、自然主義的な主観主義に陥ったのに対して、日輝はこの点の修正に努め、本仏としての自己実現を仏道としたのである。

と、論評されている。

優陀那日輝の置かれた時代は正に、近代国家の樹立、諸外国との交渉、西洋文化、科学の流入。芸術、文学、儒学、国学の復興と進展、大乘非仏説論、廃仏毀釈、国民の知識教養の向上といった文明開化へ突入した時代であった。皮肉にも仏教教団ははまだ徳川幕府の保護政策の惰性から抜けきれず旧態依然として惰眠をむさぼり、大きく時代に遅れをとっていた。仏教界全体の権威は失墜し、存亡の危機に瀕していたのである。このような時代状況の中で優陀那日輝は、天台大師、妙楽大師、伝教大師、日蓮聖人によって開頭、実践、法門化された、法華経の根本教理に則った上での展開として空理、空論でない教学（宗学）を実学として構築し、時代に対応したのである。優陀那日輝自身「宗祖を越える」、「宗祖を知らず」、「宗祖からの逸脱」、「宗祖教学の歪曲」、「仏祖との感応の希薄」、「冷徹な哲理」、「合理主義」、「観念論」、「観心宗学」、「摂受主義」、「時代、社会への迎合」、「天台摺り」など様々な批判、が噴出する事を誰よりも覚悟、承知の上で、現在に日蓮聖人が生きておられたらどうなされるかを観心し、上述の法華仏教の哲理としてはクライマックスのものとも言える「人間本仏論」、とも称せる日蓮宗一致派教学が優陀那日輝によって大成されるのである。そして、この優陀那教学が初代日蓮宗管長新居日薩によって公認された事で、日蓮宗の教師、在家信者が堰を切ったように社会に進出し、医学系・理工系・文学系・哲学系・語学系、政治・経済・教育・福祉等々、多種多様な場で、公然と活躍できた事は歴史的事実といえる。それは、自己においては法華経八卷二十八品南

無妙法蓮華經の題目信仰を持ちながら、社会の現場では法華經、御遺文等の具体的文章や教学用語を使わずに、法華經が目指す世界観を、法華經の原理面から、言語化し、行動し、実現させていくものであった。

具体的人物例

具体的に人物を挙げれば切りが無いが、小野文珽先生が『仏教教育・人間の研究―斉藤昭俊教授古希記念論文集―』に寄せられている〈日蓮宗寄宿舎「茗谷学園」のめざしたもの〉、という論稿を参照し、二、三例を挙げれば、戦後、日本再建の基礎を作り、第五十六代内閣総理大臣に就任した石橋湛山。その生涯の半生を癩病患者の救済に捧げた綱脇龍妙。東京帝国大学からオクスフォードに留学し羅什訳『法華經』を英訳した加藤文雄、等々多数に昇る。周知の通り、いま挙げた人物は、優陀那日輝時代の人物ではないが、優陀那日輝の実学が、優陀那日輝滅後、新居日薩、日蓮宗大学林林長、現立正大学初代学長小林日董を経て実った事跡であると見る事ができるのである。なぜなら、彼らは優陀那日輝の学風を継承しようと志す孫弟子にあたる堀之内妙法寺第二十九世武見日恕や、山田一英らの創説した日蓮宗寄宿舎、茗谷学園から輩出された人達である事からも首肯できる。因みに浅井円道先生も『日蓮聖人と真言教学』所収「優陀那和尚の宗学する態度」という論稿において、優陀那日輝の観心宗学批判に対して次のように述べられている。

輝師の宗学は観心宗学だといわれても、輝師としては別に痛痒を感じなかったことになる。殊に彼の門下からは薩鑑修をはじめ数々の勝れた行動仏教家が輩出して輝師の宗学を実現した面もあったことを思えば、猶更である。このようにみえてみると、優陀那日輝の宗学が社会と干渉の甚だ観念的なものである、という批評は、的を射たものでない事になる。むしろ、優陀那日輝に当てられる批判の鋒先は、現今の我々日蓮宗に向けられるものでなからうか。なぜなら、社会に進出し、交わり活動する上で表明しておかなければならない教学的裏付けを時に怠り、時代に

与えられた自由の環境の中で、ご都合主義的に行動し、自由奔放に振舞っているのが筆者も含めた現状の日蓮宗であると察せられるからである。

むすびにかえて

教学と教化学の一体化を考える上で考察を試みてきたが、結論付けてみたい。

近世一如日重に端を発し、優陀那日輝によって大成された、日蓮宗一致派教学の自由性は、与えられた自由（フリーダム）ではなく、自ら主体性をもって打ち立てる自由（リバティ）であって、この教学は時代に即応しながら時代に埋没せず、法華経の体理（妙法）と同化し主体的に実践、創造、発掘、実現を目指す自行的傾向の強い厳しい教学と言えるのである。襟を正される思いである。

法華経的なものを見付ける事、それを認める事、また法華経的なものを発掘、創造する、という事は簡単ではない。日頃の実存的な教学の研鑽と、仏祖への信頼と問い掛け、によって慎重になされていかなければならない、そこに教学と教化学の一体化がおの自ずと立ち現れてくるように思われるのである。

最後に我々日蓮宗教師に投げかけられた著名な歴史学者、日蓮研究者である上原専祿の言葉を誠めとして記し、攔筆したい。

深い教理の認識を媒介にしなければ、実際問題との取り込みについての正しい姿勢も出ないのであるまいか（中略）、そういう深い教理把握が欠落しますと、きわめて警戒すべき、日蓮聖人教義の実用主義的解釈が生じてきます。日蓮聖人の名において自己流の社会論や文化論を打ちまくることなど、許されるべきではない、と思います。

※ 本稿は、煩を省いて論文形式をとらず、覚え書きとして筆を進めた、非常に雑駁な考案である事をお許し願いたい。興味を持たれた方は、本稿参考文献や原本にあたって頂き、御助言、御教示を賜れば幸いと思う。

参考文献

- 望月敏厚著『日蓮学説史』
執行海秀著『日蓮宗教学史』
執行海秀著『日蓮宗信仰の種々相』
茂田井教亨著『日蓮教学の根本問題』
茂田井教亨著『本尊抄講讀・下』
浅井圓道著『浅井圓道選集第三卷 日蓮聖人と真言教学』「優陀那和尚の宗学する態度」
浅井圓道著『仏典講座38 観心本尊抄』
渡邊宝陽著『日蓮宗信行論の研究』
高木豊・冠賢一編『日蓮とその教団』小野文瑠稿「教団論のための教学論」
季刊誌『福神』第一号西山茂稿「近代日蓮主義研究Ⅰ田中智学と日蓮主義を再考する」
季刊誌『福神』第二号小野文瑠稿「素描・近代日蓮宗の教学者②仏教日蓮派か、日蓮教仏法派か」
季刊誌『福神』第三号小野文瑠稿「素描・近代日蓮宗の教学者③信教の自由と不受不施」
季刊誌『福神』第四号小野文瑠稿「素描・近代日蓮宗の教学者④百年の大計とその夢のあと」
『仏教教育・人間の研究―斎藤昭俊古希記念論文集―』小野文瑠稿「日蓮宗寄宿舎「茗合学園」のめざしたもの」
上杉清文・末木文美士責任編集シリーズ日蓮5『現代世界と日蓮』小野文瑠稿「近代教学と日蓮思想第一章・日蓮教学

の展開と論争―近世から近代へ―

新居日薩和上百遠忌顕彰会編『日薩和上百遠忌記念集』

佐藤弘夫著『日蓮 われ日本の柱とならむ』

福神叢書2『日蓮的あまりに日蓮的な』佐藤弘夫稿「立正安国論をめぐって」

管野博史著『法華経入門』

ひろさちや著『法華経』の真実』

日蓮宗東京西部教化センター発行『立正安国論』をいかに読むか』

上原専祿著『死者・生者―日蓮認識への発想と視点』

小野文瑛講演録「日蓮本仏論批判・日蓮宗の本尊論」近畿教区教化交流センター「布教ファイル編集委員会」

中村元著『仏教語大辞典』

宮崎英修著『日蓮辞典』

『日蓮宗事典』

『日蓮聖人遺文辞典・教学編』

『日蓮聖人遺文辞典・歴史編』